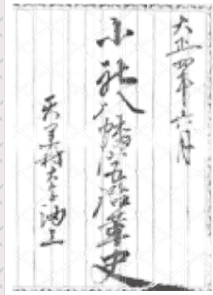




▲施福寺薬師堂の緒仏(上段中央が薬師如来坐像)(天美西3丁目)と本堂前の「薬師如来堂前常夜燈」



▲大正4年の「小社八幡宮沿革史」の表紙(永田弘子氏提供)



▲八幡小社本殿 右に八幡神(応神天皇)、左に東大阪市・枚岡神社から移された神形石を祀る。



▲油上の八幡小社境内(天美西3丁目) 社殿前の両側に、2本の榑の切り株が残る。

阿麻美許曾神社と共に氏神社薬師如来を祀る神仏習合の社

天美西三丁目の古砂山施福寺(真宗大谷派)の東南側に御社が見られます。社殿には、「八幡小社」の額が掲げています。同社は、江戸時代の丹北郡油上村の集落のほぼ中央に位置します。油上村は、明治二十二年(一八八九)に隣村の芝村や城連寺村・池内村・我堂村・堀村と合併して天美村となりました。

江戸時代以降、油上・芝・城連寺・池内村は、付け替えられた新大和川北側の枯木村・矢田部村・富田村(大阪市東住吉区)と共に、川南となった枯木村の阿麻美許曾神社(矢田七丁目)の氏子でした。同社は阿麻岐志の宮ともよばれ、天美の地名の由来となりました。延喜式内社の古社で、松原六社参りでも有名です。油上の人々は、阿麻美許曾神社を氏神としながら、同時に地元八幡神を祀る八幡宮(八幡小社)も建立したのです。

八幡神は奈良時代以降、わが国で最も広く信じられ、神と仏が一体となる神仏習合の先駆けとなりました。神社や寺院へ同時にお詣りする日本人の信仰形態において、受け入れやすい神だったので、油上の八幡小社と同じように、枯木村でも阿麻美許曾神社を氏神としながらも、枯木八幡宮を創祀し、より身近かに信仰を強めていたのです。

大正四年(一九一五)六月に書かれた『小社八幡宮沿革史 天美村大字油

上』の史料が地元に残されていました。沿革史によると、同社の創建年代は不詳ですが、慶応四年(一八六八)の油上村の神社・寺院の書上帳に、次のように記されています。

江戸時代以降、境内は今の鎮座地に接する北側にありました。「惣村方支配」と書かれ、油上村の人々の鎮守だったのです。領主である関東の大名・秋元氏からは、「除地」として税を免除されていました。江戸時代後期ごろ、社殿を再建するため、今の境内に移転しました。その際、神仏習合として薬師如来を遷したと記されています。現存する石鳥居の両柱に「文化十二乙亥九月吉日 現住法印覺道」「奉献 薬師講中」と刻まれています。文化十二年(一八一五)九月に社殿が再建されて薬師如来を祀り、石鳥居が建てられたと思われまます。

石鳥居を奉献したのは、薬師如来を信仰する薬師講の人々でした。薬師如来は薬壺を持ち、病いをなおしてくれる仏として信じられました。当時、寺の住職である覺道が関わりました。覺道の事歴は不明ですが、施福寺か阿麻美許曾神社境内にあった天見山神宮寺との関係も考えられます。

施福寺山門横に薬師堂が建っています。堂内には薬師如来坐像を中心に、日光菩薩・月光菩薩・四天王・十二神将や釈迦如来坐像・阿弥陀如来坐像などが祀られています。もともと、施福

寺の西方の天美西公園近くに古寺がありました。慶長二十年(一六一五)の大坂夏の陣で焼失したことから、仏像群が施福寺に移されたと伝わっています。今も「薬師堂」の小字名が残っています。江戸時代初めから、油上村では薬師信仰が広まっていました。延宝七年(一六七九)の『河内鑑名所記』に「油上村の薬師」として紹介されるほど有名だったのです。施福寺本堂前には、享保十二年(一七二七)三月八日、理勝が建てた「薬師如来堂前常夜燈」も現存しています(『歴史ウォーク』35・202)。

一方、阿麻美許曾神社本殿前の狛犬の台石に「天見山」「阿闍梨快道之代」「文化四年九月」とあります。神宮寺の僧、快道の文化四年(一八〇七)に狛犬を設置したことがわかります。同じ文化年間の快道と覺道の関係は不詳ですが、興味深い石造物です。

八幡小社では、昭和時代末期まで毎年九月十五日に大祭を行い、太鼓を打ち鳴らし、地域の人々の参拜もありました。明治時代後半、近くの三木竹松らが宮中(皇居)へ勤勞奉仕に出向きました。その際、のちの大正天皇から下賜された榑の若木を二本、境内に植樹しました。百有余年経った今では、切り株だけになりましたが、記念物として記憶に留めておきたいものです。八幡小社社殿は新しく再建されましたが、河内の薬師信仰を知る上で、貴重な歴史遺産なのです。